

研究ノート

美利河 1 遺跡 D 地点出土の峠下型細石刃核の運用に関する考察

3.1 はじめに

北海道南部は、旧石器時代に利用されていたと思われる黒曜石原産地は存在しないが、国縫川流域などで良質な珪質頁岩を得ることが可能な頁岩地帯である。それを裏付けるように、珪質頁岩製石器が主体となる旧石器時代遺跡は函館市石川 1 遺跡や知内町湯ノ里遺跡、八雲町大閑校庭遺跡など渡島半島の各地に存在し、珪質頁岩製石器の製作拠点と想定される今金町美利河 1 遺跡や木古内町新道 4 遺跡が確認されている。美利河 1 遺跡においては良質な珪質頁岩の産出地である国縫川に隣接しており、多数の原石が搬入された原産地遺跡であるが、このような石材環境にありながらも一部の峠下型細石刃核石器群において黒曜石を石器素材として選択的に利用する特異な状況が確認されている。

遠隔地石材である黒曜石が豊富な珪質頁岩を有する地域である北海道南部に搬入される背景を明らかにすることは、旧石器時代における人類の行動様式をよりローカルな視点で捉え、石材原産地と消費地の関係性を理解する上で非常に重要である。そのためには、石器群を構成する各種の石器をどのような管理下で運用していたのかを明らかにしなければならない。そこで本稿では、黒曜石製の峠下型細石刃核石器群が確認されている美利河 1 遺跡 D 地点出土の峠下型細石刃核関連資料を対象とし、大塚（大塚 2022）や青木（青木 2023）の研究を参考に石器表面の微細痕跡の観察に基づき、その運用について考察を行うことを目的とする。

3.2 美利河 1 遺跡 D 地点の概要

美利河 1 遺跡は北海道南部の渡島半島北部、日本海に注ぐ後志利別川の支流ピリカベツ川の左岸丘陵上の標高 130 m～150 m 地点に位置する。1978 年に美利河ダム建設に伴う事前調査によって発見されて以来、これまで A・B・C・

D・E・K の計 6 地点で発掘調査が実施され、遺跡の範囲は約 125,500 m² と推定されている（今金町教育委員会 2002）。

D 地点は 2000～2001 年の調査で合計 206 m² が発掘調査され、計 29650 点の石器が出土し、峠下型細石刃核石器群と剥片を素材とする特徴的な形態の尖頭器からなる石器群の二つの石器群が確認された（今金町教育委員会前掲）。組成は表 3.1 のとおりである。両者の平面的、垂直的な位置関係は重複しているものの、峠下型細石刃核石器群では細石刃核の素材に黒曜石を選択的に利用し、尖頭器石器群では尖頭器の素材に主に珪質頁岩を利用するなど、石材の利用状況において両石器群は異なる。また、峠下型細石刃核石器群に尖頭器が伴う例は本遺跡以外では知られていないことから、ここでは両者は由来が異なる石器群と判断した。

3.3 資料と分析方法

出土資料のうち、確実に峠下型細石刃核石器群に帰属すると考えられる黒曜石製の峠下型細石刃核 12 点、左側面に明瞭な素材剥片の主剥離面が残存し片面調整の細石刃核から剥離された削片 61 点を観察対象とした。分析の前段階として、細石刃核と削片の接合を行い、個体別資料の把握を行った。その結果、細石刃核と削片が接合した例は 1 例、削片同士の接合は 12 例存在し、合計 44 個体に分別することができた。

この 44 個体を対象として、石器の運用過程における素材の準備段階、製作段階、細石刃剥離段階、廃棄の各段階で形成される素材主剥離面、器体の調整剥離面、細石刃剥離打面、最終的な細石刃剥離作業面のそれぞれの表面状態を観察し、どのような過程を経て各個体が遺跡に残されたのかを分析していく。

資料の観察には肉眼、ルーペのほか 10～240 倍の範囲で拡大可能なデジタルマイクロスコープ（Dino-Lite Premier M

表3.1 D地点出土石器組成

石材	M C	細 石 刃 核 削 片	細 石 刃 刃	彫 石 彫 器 削 片	錐 形 石 石 削 器	R F	U F	両 面 調 整	尖 頭 器	搔 器	削 器	抉 入 石 器	石 核	そ の 他	剥 片 ・ 碎 片	総計			
頁岩	1	21	882	12	18	5	158	195	13	26	8	24	6	98	46	25137	26650		
黒曜石	12	72	468	18	10	32	5	15		2	5	1	2	3		2214	2859		
メノウ					1								1		22	24			
安山岩								1						2	4	7			
チャート								1						4	1	6			
砂岩													5	1	6				
マンガン													31		31				
その他													48	7	55				
不明													7	5	12				
総計		13	72	489	900	23	50	5	165	210	13	28	8	29	7	101	146	27391	29650

型番 DINOAM4113ZT) を使用した。また、石器の表面状態を記録する際にはデジタルマイクロスコープの撮影機能を使用し、必要に応じて偏光機能を使用して反射光を低減させている。

3.4 結果

3.4.1 観察された痕跡の種類（図3.1）

資料全体を通して観察された剥離面の微細痕跡は、大きく以下の4つに区分することができた。

- A：ランダムな深く長い線状痕
- B：クレーター状に抉れるピット
- C：ランダムな浅く短い線状痕
- D：一定方向に延びる細い線状痕

これらのうち、A・Bについては御堂島（御堂島2020）や沢田（沢田2020）の研究から、石器を長距離運搬した際に生じる痕跡と判断できる。そのため、AおよびBの付着状況によって剥離面形成後、廃棄までの期間にどの程度の時間的隔たりがあるかを推測することが可能である。Cは、比較対象として観察を行った二次加工の無い剥片の主剥離面にも少量確認されたことから、石器の埋没過程で一定量形成されるものと考えられる。一方で、剥片の主剥離面全面に及ぶものは無かった。そのため、このタイプのものが剥離面の全面に観察される場合は自然の影響だけでなく、使用や運搬など人為的作用の累積が生じているものと考えられる。Dについては使用痕と考えられるものであり、器体長軸に平行あるいは直行するものが、細石刃剥離作業面付近もしくは削片の主剥離面側の側縁付近で確認された。

これらの観察結果から、運搬もしくは使用によってもたらされたと考えられる細石刃核と削片の石器表面状態について、明確な運搬痕と判断されるAおよびBを基準に、次の4つの段階に区分した。ステージI：剥離面の一部にま

ばらにCが存在するもの。ステージII：Cが剥離面全体に及ぶもの。ステージIII：剥離面全体を覆うCに加えて、剥離面の一部にAまたはBが見られるもの。ステージIV：剥離面全体を覆うCに加えて剥離面全体にAまたはBが見られるもの。

ステージIは剥離面が形成された後それほど時間を経ずに石器が遺棄され埋没過程で生じた傷のみが石器表面に残されたと考えられるものである。ステージIIは剥離面が形成されたのち短期間の運搬や石器の使用が行われたことで痕跡が残されたものと考えられる。ステージIVは剥離面形成後、長期間にわたる運搬や使用が繰り返された段階のものと考えることができ、ステージIIIはステージIIとステージIVの中間の段階のものと考えられる。

3.4.2 細石刃核の観察結果

前述の区分に基づき、細石刃核の素材主剥離面とその他の面との比較を行った結果が表3.2～3.4である。

表3.2 細石刃核素材主剥離面と器体調整剥離面

細石刃核	素材主剥離面					
	I	II	III	IV	不明	総計
器体調整部	I				2	2
II		2	2			4
III			2			2
IV				2		2
不明					2	2
総計		2	8	2		12

被熱により詳細な観察ができなかった2点を除いて、ほとんどの細石刃核の素材主剥離面にはステージIVの段階に至る多量の傷が残されていた。一方で、器体の調整剥離面や打面部ではステージI～IVの各段階の面が見られた。ま

表 3.3 細石刃核素材主剥離面と細石刃剥離打面

細石刃核		素材主剥離面					
細石刃剥離打面		I	II	III	IV	不明	総計
I					1	1	
II			2	1		3	
III				5		5	
IV					1	1	
不明					2	2	
総計		2	8	2	12		

表 3.4 細石刃核素材主剥離面と細石刃剥離作業面

細石刃核		素材主剥離面					
作業面		I	II	III	IV	不明	総計
I			2	3		5	
II							
III				5		5	
IV							
不明					2	2	
総計		2	8	2	12		

表 3.5 削片素材主剥離面と器体調整剥離面

MC削片		素材主剥離面					
器体調整部		I	II	III	IV	不明	総計
I			10	18	1	29	
II	1	2	3	5		11	
III			13	2		15	
IV							
不明		1	5			6	
総計	1	3	31	25	1	61	

た、細石刃剥離作業面では、ステージ I とステージ III のいずれかとなった。そのほか、2 点の細石刃核の素材主剥離面に明瞭な使用痕が確認された。

3.4.3 削片の観察結果

同様にして、削片のそれぞれの面において観察を行った結果が表 3.5~3.7 である。まず、素材主剥離面は細石刃核同様に多量に傷が残るものが中心であったが、細石刃核とは異なりステージ I および II などの傷が少ない段階のものも少量見られた。器体の調整剥離面については傷の少ないステージ I が最も多い傾向となった。また、打面についてはステージ I またはステージ III に二分された。作業面は 1 点のみステージ I であったが、これは細石刃核との接合資料である。そのほか、11 個体の素材面や主剥離面に明瞭な使

表 3.6 削片素材主剥離面と細石刃剥離打面

MC削片		素材主剥離面					
細石刃剥離打面		I	II	III	IV	不明	総計
I				4	13		17
II			1				1
III				19	4	1	24
IV							
不明			1	2	1		4
なし		1	1	6	7		15
総計		1	3	31	25	1	61

表 3.7 削片素材主剥離面と細石刃剥離作業面

MC削片		素材主剥離面					
作業面		I	II	III	IV	不明	総計
I					1		1
II				3			3
III				3			3
IV							
不明			1	8	9		18
なし		1	2	17	15	1	36
総計		1	3	31	25	1	61

用痕が確認された。

3.5 考察

以上の結果から、美利河 1 遺跡 D 地点における黒曜石製の細石刃核の運用について考察する。

まず、細石刃核の素材主剥離面の表面状態はステージ IV が大部分であるのに対して、製作段階である器体の調整剥離面の表面状態はステージ I からステージ IV まで各段階のものが存在し、両者に大きな差が存在する。これは、細石刃核の素材となる剥片が既に石核から剥離された状態で長期間運搬され、それを順次細石刃核へ加工していったため器体調整を行った剥離面における微細痕跡の発達状況に差が生じたと考えられる。これは同時に、製作時から経過した期間に個体差があることを示しており、遊動しながら漸次的に細石刃核を製作する一方で、廃棄するタイミングはある程度決まっていた可能性がある。一方、削片では器体の調整剥離面や打面部で細石刃核よりも低いステージの割合が多い傾向があった。細石刃核と削片の接合がわずか 1 個体のみであるほか、44 個体中過半数の 32 個体の細石刃核が遺跡外に搬出されていることから、削片剥離が行われた個体はリダクションが進んでいない状態、即ち製作されてから比較的時間が経過していなかったものと推測できる。

また、細石刃剥離によって隨時更新される細石刃剥離作業面では、新鮮な面が残されるものが半数である一方で、ステージIIIの段階のものも半数存在していた。これは、細石刃剥離が終了した段階の細石刃核であっても細石刃核が運搬もしくは細石刃核とは異なる用途で使用されたためと考えられる。これについては、2点の細石刃核に明瞭な使用痕が確認されていることに加えて二次削片や打面再生削片にも使用痕が確認されていることから、細石刃の生産と細石刃核の二次的な使用が段階として分離しておらず、必要に応じて役割を入れ替えながらフレキシブルに運用されていた可能性がある。

3.6 おわりに

本遺跡で見られた峠下型細石刃核の運用上の特徴は、①素材を剥片の状態で長期間携帯し、②製作は漸次的に行い、③細石刃剥離以外の用途が存在する、という3点にまとめることができる。こうした特徴が、峠下型細石刃核石器群に普遍的なものかどうかの検証が今後の大きな課題となる。

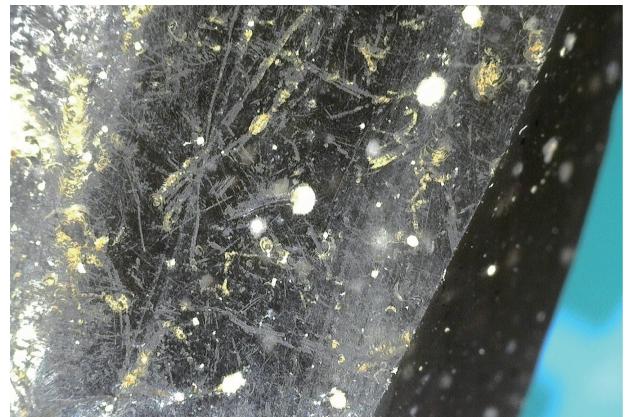
本遺跡においては、細石刃の二次加工の割合が他遺跡と比較して著しく低いことが挙げられているが（宮本2003）、そうした状況と本遺跡の峠下型細石刃核石器群の運用上の特徴とが関連している可能性がある。頁岩の石材補給に加えて、保有する黒曜石製石器から搬出個体の選別といった石器石材の切り替えのような作業が行われた結果、細石刃の生産と細石刃核の運用の中止が発生したと考えることは可能であろう。

また、黒曜石製の資料のうち、多くは赤井川産と推定されているものの理化学的な分析は実施されていない。そのため、産地同定などの理化学的分析を通じて細石刃核の属性を明確化し、運用状況と立地、使用石材の産地といった情報を詳しく整理していく必要がある。

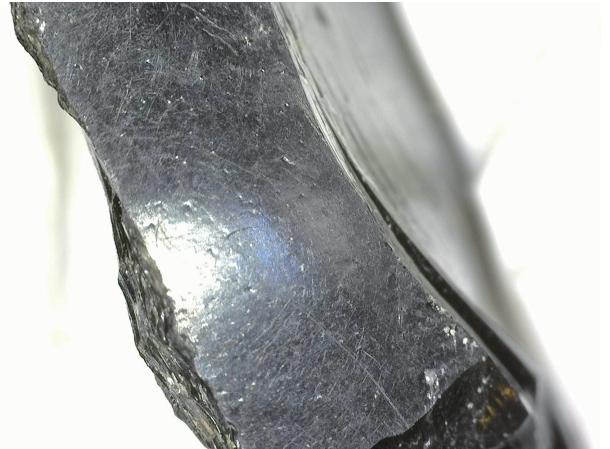
参考文献

- 青木要佑・佐々木繁喜・傍島健太 2023「本州における白滝型細石刃核の石材獲得・消費戦略」『旧石器研究』19 pp.39-58
 大塚宜明 2022「北海道東部の北筒式期における石器群の構造と原料の獲得消費—斜里町ピラガ丘遺跡の分析を中心に—」『札幌大学人文学紀要』119 pp.89-153
 今金町教育委員会 2002『ピリカ遺跡II』
 沢田 敦 2020「運搬痕跡研究とその考古学的意義」『石器痕跡研究の理論と実践』pp.49-83 御堂島正編
 御堂島正 2020「黒曜石製石器の運搬痕跡に関する再検討」『大正大学考古学論集』pp.1-24 大正大学考古学論集刊行会
 宮本雅通 2003「ピリカ遺跡D地点出土細石刃の観察」『北海道旧石器文化研究』第8号

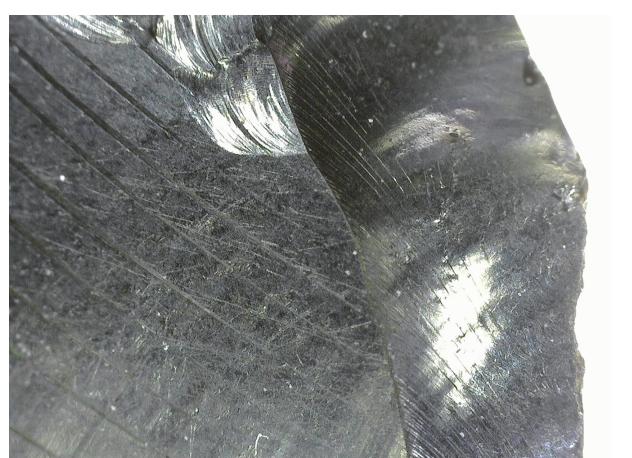
矢原史希（今金町教育委員会）



細石刃核素材主剥離面
ロームが入り込んだBと縦横に走るAで覆われている
4mm



削片素材主剥離面
剥離面全体がCで覆われ、下部にAが走る
4mm



細石刃核素材主剥離面
剥離面全体がCで覆われ、中央やや左下に横位のDが走る
4mm

図3.1 石器表面の微細痕跡